

# 無茶有茶

(無茶有茶・小堀宗慶宗匠筆)

## 江戸城下に伝わった地方の野菜

大竹 道茂

我が国の野菜は、古くは魏志倭人伝に「シヨウガ、タチバナ、サンシヨ、ミヨウガ」などが記述されている。以後近隣諸国から渡来した野菜が、我が国の気候風土の中で、育まれ、地域の食文化を生んできた。

伝統野菜は、固定種と云われるもので、今日市場に出回っている交配種(一代雑種)とは異なり、タネが採れる野菜で、栽培と収穫は季節限定、形が揃わないのが特徴で、流通に乗りづらいから、その土地に行かないと食べられないものが多い。伝統野菜は、昔から生産者の思いがタネに込められて受け継がれてきた野菜だ。

形が揃いの野菜だから、その中で一番、その野菜の特徴を表しているのを選んで、タネを採り次の時代に伝えてきた。そこには、生産者の好みや市場の要求なども反映されていて、まさにその時代に生きた人々の思いを今日に伝えているものと云っている。

タネを播き、出来たものを食べ、そのタネをまた播きと云う

ことで、タネを通して、命が今日までつなげてきた野菜で、その過程に物語が生まれている。

参勤交代が確立する一六三〇年代以降、江戸の滞留人口は増加したことから、新鮮野菜が不足していた。諸大名の中には、江戸の下屋敷などに、国許から野菜のタネと共に百姓なども呼び寄せて、野菜栽培を行っている。

五代將軍綱吉がまだ館林の城主だった松平右馬頭(うまのかみ)の時代、下練馬で病期療養をしているが、その際、地域の農業振興にと尾張から大根のタネを取り寄せて、土地の百姓に播かせたのが地大根と交雑し、一メートルに及ぶ立派な大根が生産されたのが練馬大根だ。

八代將軍吉宗はたびたび南葛飾郡を鷹狩で訪れていた。たまたま田圃の中の祠で、昼食を所望したとき、出してもらった餅の澄まし汁に入っていた青菜が美味しいことから、この地が小松川だからと、小松菜と吉宗が命名したと伝えられている。

家康、秀忠、家光、家綱と四代の將軍たちは、大好きな真桑

瓜で話が繋がる。

真桑瓜は美濃国の特産だが信長が土地の名前から名付けたとの説もある。

百姓出の秀吉は、たびたび瓜畑での遊宴を好み、武将たちを招き大騒ぎをしていたが、これら瓜畑遊宴は戦国武将達のならいとなり、家康も、真桑瓜の栽培適地を探していた。

元和三年（一六一七）の記録によると、お鷹場や、鮎漁ができる多摩川が近くにある、武蔵の総社六所宮（現大國魂神社）が鎮座する府中の地には、御瓜田（ごかでん）を設置したが、元和二年（一六一六）に没した家康が、楽しみにしていた真桑瓜を食べたかどうかは定かではない。

秀忠の時代、美濃国真桑村から瓜作りの名人を毎年府中に呼んでいた。

美濃国上真桑村百姓庄左衛門と、下真桑村百姓久右衛門の二人で、毎年二月初め頃に府中に来て、連作障害を防ぐために、栽培に適した砂質土壌の畑を府中三町とは政村の田地から選ぶことから始めた。選ばれた栽培地は竹矢来で囲み、脇には、毎年小屋を建てて寝泊まりし、栽培管理を行っていた。

名人たちは、定められた量を収穫し幕府へ上納すると八月の末には美濃に帰っていくと云う事が毎年繰り返されていた。

真桑瓜が大好きだった家光が三代將軍となった元和年間（一六一五～一六二三）には、江戸柏木（現・新宿区柏木）の神田川流域に將軍の畑・御前栽培畑が設けられ、真桑瓜の上納が課せられた。その後、元禄一八年（一六九九）に内藤新宿（現・新宿）として宿場が設けられると、鳴子瓜は特産物になった。

この事は地元成子天神社境内に、JA東京グループが建立した江戸東京の農業説明板に書いてある。

四代將軍家綱の明暦三年（一六五七）には、江戸隅田村（現・墨田区堤通）の木母寺境内に將軍の別荘・隅田川御殿が建てられると、その隣接地に御前栽培畑が作られ、そこでも真桑瓜が栽培されていた。

家康が江戸に入ってから以来、將軍家への農林水産物の上納地は、府中の御瓜田を初め、柏木村と隅田村に御前栽培畑が設けられた他、武蔵小金井の御栗林からは栗が上納されていた。

当研究会では来年、府中市の都立農業高校で御前栽培瓜を、また、新宿区立柏木小学校では二百年余の時空を超えて、鳴子瓜の復活栽培を支援する予定でいる。



\*おおたけ みちしげ

一九四四年東京生まれ。江戸東京・伝統野菜研究会代表、農水省選定「地産地消の仕事人」。著書は「江戸東京野菜」物語篇と図鑑編。ブログ「江戸東京野菜通信」で日々情報を発信中。